

各関係機関団体の長
各病虫害防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成20年度病虫害発生予報第9号(1月)について

このことについて、病虫害発生予報第9号を発表したので送付します。

予報第9号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
イチゴ	うどんこ病 ハダニ類	やや少 やや多	やや少 やや多	並 やや多
ナス	すすかび病	並	並	やや多
トマト	葉かび病	やや多	並	多
キュウリ	べと病 うどんこ病	やや少 やや多	やや少 やや多	やや多 やや多
野菜共通	ミナミキイロアザミウマ コナジラミ類	並 やや少	並 やや少	並 並

この時期の病虫害で防除上特に注意すべき事項

- 多湿条件で増加する各種病害に対する防除の徹底
ナスのすすかび病、トマトの葉かび病等の各種病害の発生が増加しています。省エネ対策で暖房機の設定温度を低くしたり、二重被覆等を行っている施設では、多湿となり発病しやすい環境になります。送風機を稼働させるなどしてハウス内の湿度の低下を図るとともに、罹病葉はできるだけ取り除き、薬剤防除を徹底しましょう。
- トマトやウリ類のウイルス病の蔓延防止
トマト黄化葉巻病、キュウリ黄化えそ病、キュウリ退緑黄化病(仮称)等のウイルス病の発生が認められています。これらウイルス病蔓延防止のため、発病株は見つけ次第抜き取り、処分しましょう。また、これらの病害を媒介するアザミウマ類やコナジラミ類の防除を徹底しましょう。



キュウリ黄化えそ病



キュウリ退緑黄化病(仮称)

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【野菜】

1 イチゴうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 12月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（ - ）。

発病株率 0.2%（平年 2.9%、前年 0.2%）

発生ほ場率 3.7%（平年21.2%、前年 7.7%）

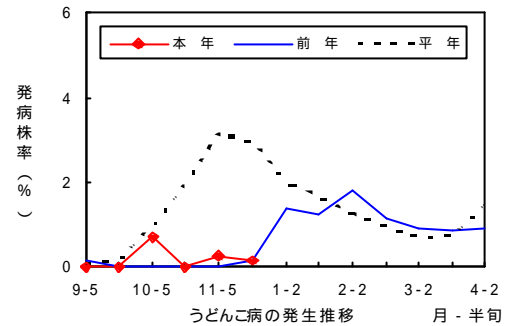
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並が高く、降水量は平年並とされている（ + ）。

(3) 防除上の注意

ア 早期発見に努め、下葉かぎ後、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

イハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 12月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（ + ）。

寄生株率 7.2%（平年 5.6%、前年 2.3%）

発生ほ場率51.9%（平年36.7%、前年34.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並が高く、降水量は平年並とされている（ + ）。

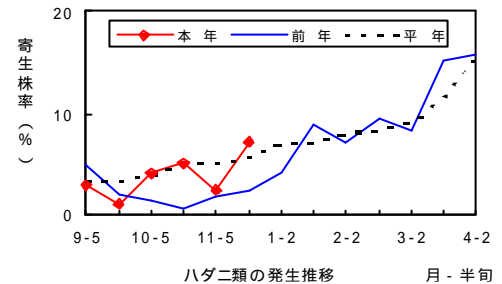
(3) 防除上の注意

ア 本種は、はじめスポット的に発生し、地面に接した下位葉ほど寄生が多いので、葉かぎ等の管理作業時によく観察し、発生を認めたら早めに防除を行う。

イ 防除は摘葉後に行い、葉裏に薬剤が十分にかかるようにする。

ウ 摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋に入れ密閉して処分する。

エ カブリダニ類を放飼しているほ場では、天敵に対して影響の少ない殺ダニ剤を散布する。



3 ナスすすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 12月3半旬調査の結果、発生量は平年並であった（ ± ）。

発病葉率 9.6%（平年 8.7%、前年 3.4%）

発生ほ場率66.7%（平年50.8%、前年33.3%）

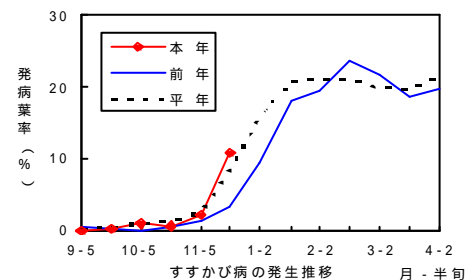
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並が高く、降水量は平年並とされている（ + ）。

(3) 防除上の注意

ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、発病初期のうちに防除を徹底する。

イ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



4 トマト葉かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 12月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

発病葉率 3.5% (平年 2.2%、前年 0.4%)

発生ほ場率18.2% (平年17.9%、前年18.2%)

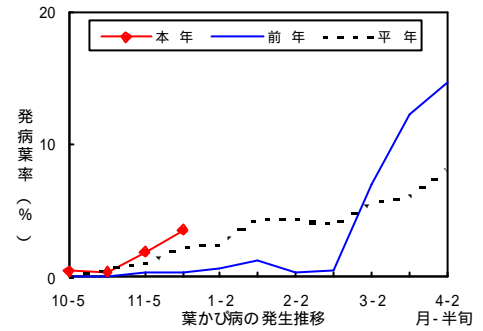
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並が高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 薬剤は葉の裏側にも十分かかるよう丁寧に散布する。

イハウスの換気を行い、多湿にならないように管理する。

ウ 肥料切れを起こすと発生しやすくなるので、適正な肥培管理を行う。



5 キュウリべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 12月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)

発病葉率 3.9% (平年 6.5%、前年 2.1%)

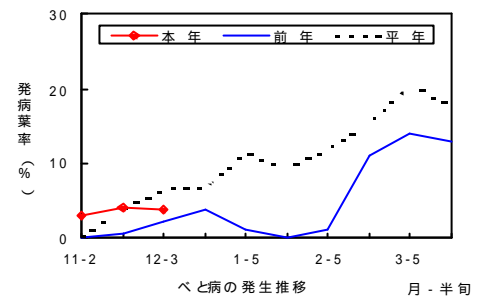
発生ほ場率71.4% (平年49.9%、前年60.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並が高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、初期防除を徹底する。

イ 肥料切れや成り込みによる草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理を行う。



6 キュウリうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 12月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

発病葉率 2.3% (平年 0.8%、前年 0.8%)

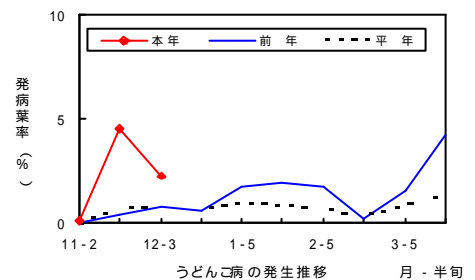
発生ほ場率42.9% (平年21.4%、前年20.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並が高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 罹病葉はできる限り除去するとともに、葉の裏側にも十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 窒素肥料の多用は本病の発生を助長するので、適正な肥培管理を行う。



7 ミナミキイロアザミウマ（野菜共通）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 12月3半旬調査結果、発生量は平年並であった（±）。

ナス寄生葉率 12.8%（平年 8.6%、前年20.9%）

発生ほ場率 88.9%（平年52.1%、前年88.9%）

ナス被害果率 0%（平年 0.9%、前年 1.5%）

発生ほ場率 0%（平年38.5%、前年50.0%）

むかし寄生葉率 0%（平年 0.5%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年 9.3%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並が高く、降水量は平年並とされている（+）。

(3) 防除上の注意

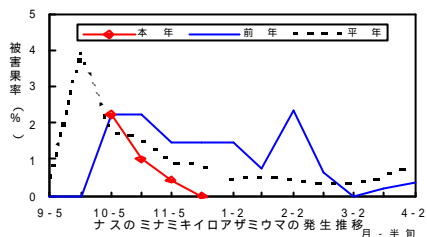
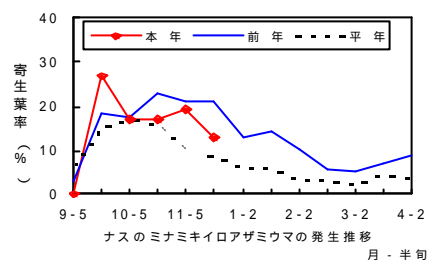
ア 本種はキュウリの黄化えそ病（MYSV）の媒介虫である。このウイルスはアザミウマ類が低密度でも伝染し蔓延するので、早期発見に努め、防除を徹底する。

イ 葉裏への寄生が多いので、散布むらがないように丁寧に散布する。また、多発した場合は、約1週間後にもう一度薬剤散布を行う。

ウ ほ場内外の雑草を徹底して除去し、害虫の生息、増殖源を絶つ。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。なお、本年度の薬剤感受性検定結果については、「病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。

（ホームページアドレス <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/d05/tebiki.html>）



8 コナジラミ類（野菜共通）

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 12月3半旬調査結果、発生量は平年よりやや少なかった（-）。

ナス寄生葉率 7.0%（前年14.8%）

発生ほ場率 77.8%（前年88.9%）

トマト寄生葉率 0.4%（平年 1.6%、前年 0.7%）

発生ほ場率 8.3%（平年38.4%、前年33.3%）

キュウリ寄生葉率 0.3%（前年 0.6%）

発生ほ場率 14.3%（前年20.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並が高く、降水量は平年並とされている（+）。

(3) 防除上の注意

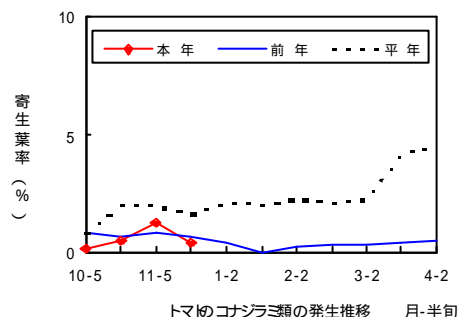
ア タバココナジラミ類はトマト黄化葉巻病（TYLCV）やキュウリ退緑黄化病（仮称）（CCYV）の媒介虫であるので、早期発見に努め、防除を徹底する。

イ 幼虫や蛹が寄生している下位葉を除去し、施設内の密度を下げるとともに、葉裏への寄生が多いので、散布むらがないように丁寧に散布する。

ウ ほ場内外の雑草の除去を徹底し、害虫の生息、増殖源を絶つ。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。なお、本年度の薬剤感受性検定結果については、「病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。

（ホームページアドレス <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/d05/tebiki.html>）



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
イチゴ 灰色かび病	並	並	並	・罹病果は見つけ次第除去する。また、下葉かぎを随時行い、株間の通風を図って湿度を低下させる。
アブラムシ類	並	並	並	
ナス うどんこ病 灰色かび病	並 並	並 並	やや多 並	・罹病葉や罹病果実は早めに除去し、ほ場外へ処分する。
トマト 灰色かび病	並	並	並	・開花後の萎れた花弁は、伝染源となるので取り除く。
キュウリ 灰色かび病	並	並	並	・開花後の萎れた花弁に、灰色のかびを認めたら防除を開始する。
キャベツ 菌核病	やや少	やや少	並	・罹病株はただちに抜きとり処分する。形成された菌核は、ほ場へ残さないよう、ほ場衛生に努める。
黒腐病 コナガ	やや少 並	やや少 並	並 やや多	

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

平年と同様に曇りや雨または雪の日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量、日照時間は平年並でしょう。

週別の気温は、1週目は平年並、2週目は平年並か高く、3～4週目は平年並でしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	20	40	40
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(福岡管区气象台 平成20年12月12日発表抜粋)

農薬の適正使用、飛散防止対策の徹底を！

全ての農薬の残留基準が農作物毎に設定され、基準値を超えた食品（農産物）は販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、ラベルをよく確認し農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう対策を講ずるなど十分に注意を払って下さい。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数など、ラベルを確認し使用基準を遵守する。

噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除について、ホームページでお知らせしています。

ホームページ
電子メール

<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/soshiki/4704204.html>
kfok0301@sp.jppn.ne.jp